

# かささぎ通信 第159号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2026年 5月 8日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2026年4月の「森三郎の作品を読む会」では、  
「三色すみれ」(『日本児童文学』5、1947年11月)と  
「あねさま人形」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』  
1949年2月)を読みました。

今回読んだ「三色すみれ」は、3月の会で読んだ「三色すみれ」の一章「不幸な港町」(「かささぎ通信」第157号参照)に続く「ゲートルと蚤」「医者とカナリヤ」二つの章です。

「ゲートルと蚤」は、ゲートルの崇拜者・エッケルマンによって、つまんでつぶされそうになった、ゲートルのベッドの上にいた蚤と恋人の蚤との対話から始まります。エッケルマンとはゲートル晩年の秘書であったドイツの文筆家です。ゲートルの死後に出版された「ゲートルとの対話」上中下巻(亀尾英四郎訳)の岩波文庫版が1940年から41年に出版されていました。ゲートルのベッドに住み、自分でも詩人とうぬぼれていた蚤は、自分と同じくゲートルを愛するエッケルマンに抱いていた仲間意識(わざわざ「同臭味」という言葉を使っています)を後悔します。蚤の娘との結婚式の場面で、作者は蚤の詩人に「ファウスト博士の独白を語らせ、蚤の娘には「わらべは見たり野中のバラ」とゲートルの詩を歌わせます。

ゲートルの生きた時代から何百年かたって、ゲートルの血を吸った家系を誇る蚤やゲートルの研究を生涯の仕事にする学者は出て、自身自身の芸術の才能を開くことの難しさを作者は嘆いています。

これとは反対に「医者とカナリヤ」は、趣味も道楽もなく毎日の仕事で疲れきった中年の医者が、若く楽しかった学生時代に出会ったオペラの女優さんのことを思いだし、心に瑞々しい若さを蘇らせる話です。診察室の鳥籠の中の、声が出なくなつたカナリヤを自由にしてやった後、医者は明るい黄色の服を着た若い女性の患者を診ます。オペラ歌手のその女性は、若き日のあの女性のようにでした。

自由にしてやったカナリヤが再び戻ってきて籠の中でコロコロと歌います。自由にしてやったカナリヤ、患者のオペラ歌手、医者心に蘇つた若きオペラ歌手について、参加者からそれぞれの感想が出されました。『赤い鳥』誌上初めて曲譜が載つた西城八十・詩、成田為三・曲の「かなりや」(1939年5月号)を作者は頭に置いて、『赤い鳥』から解き放たれた創作活動への思いを描いているのではないだろうかという感想も出ました。

「三色すみれ」は一花に三色の花色が認められた花です。「不幸な港町」は絵画、「ゲートルと蚤」は詩文、「医者とカナリヤ」は音楽を題材に、作者の芸術観がみえるようでした。

次の「あねさま人形」は店先から今戸焼の姉さま人形が売られて、女の子の物になった話です。この人形は、職人に目を付け忘れられ、外の世界を見ることができませんでした。人形遣いのおじいさんが操る浄瑠璃「奥州安達原」の「袖萩祭文」を見ていた女の子は、盲目の袖萩がかわいそうになり、自分の持っていた目の見えない姉さま人形を胸に抱きしめました。森三郎さんらしい世界でした。

## お知らせ「森三郎に親しむ集」13(2026)開催

時 6月7日(日) 13時30分~15時 場 中央図書館

内 森三郎童話読書感想文最優秀作品朗読「夜長物語」の追体験、森三郎童話の紹介「森三郎童話と二炊の夢」、新作紙芝居

「ジャンケン橋」の上演、ヘルマンハーブの演奏など

## ※森三郎童話から始まるイメージ画展

時 5月30日(土)~6月13日(土) 場 中央図書館

〈次回予定〉2026年6月12日(金) 午後一時半~三時半

「蓬萊(ほうらい)」(『児童文学者協会編『日本児童文学選』年刊』

第一集、桜井書店、1948年7月)

「ザアカイとユリ」(『幼年童話集 帽子に化けたクロネコ』東京

一陽社、1949年2月)